



Title	D.H. ロレンス 『恋する女たち』 -現代における生命の相-
Author(s)	富永, 昭
Citation	明治大学教養論集, 60: 21-41
URL	http://hdl.handle.net/10291/8953
Rights	
Issue Date	1970-12-01
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

D・H・ロレンス『恋する女たち』

—現代における生命の相—

富 永 昭

『虹』に於て3代に亘る男女の生活を描いたロレンスは、アーシュラ・ブラングウィンという自分と同時代に設定された女性に焦点を当てるに至って、現代の精神と人間の肉体的存在という問題を統一した作品の世界に織り込む事ができなくなり、それを次の作品のテーマとして預けた形で物語の筆を擱いてしまった感があった。

一個の肉体的存在として孤立した両性の生命が互に均衡を保った関係を維持しながら、同時にその中に人間の精神的世界の核心を据えるという姿がロレンスの求めたものだと考えられる。彼が『虹』で描こうとしたのは、両性の結びつきは、それぞれの肉体がもっている「物」としての慾求の抜き差しならぬ吸引力によるものであって、その本質は観念や精神にあるのではないという事であった。観念や精神が介入する時、必ずそこで自我の恣意的な慾求が本来あるべき人間の純粋な結びつきを歪めるのである。そしてそこに、肉体そのものの自我の盲目の慾求が重なって、明晰さと流動性を保った両性の静謐な姿が崩壊してゆく事になる。

アーシュラの精神的な憧憬とアントン・スクレベンスキーの近代的な生命否定の思想とを同一平面に捉えられなかったところに『虹』の行きづまりがあったのだが、その因は更に深く考えれば、アーシュラの精神的憧憬も虹のイメージで暗示されているだけでその実体は明らかにされておらず、アントンの近代

的精神の欠陥も肉体的存在の狭さが国家尊重の思想で糊塗されていてその究極の有様は表現されていない、という事に帰着する。二人の間に残された問題は『虹』がそれまでたどって来ていた問題と次元を異にするものであったというべきであろう。この二人の最後の問題にぶつかったところでこの作品の主調であった問題は既に描き尽されていたのである。『息子と恋人』のテーマは母の精神的な支配からの脱却であり、ロレンスはポールに存在の究極の拠り所としての肉体を与える事によって作品のテーマを逆に浮彫させると同時に、次の作品のテーマを暗示させていた。従って『虹』においては肉体的存在の赤裸々な本質を描く事が必然的にテーマとなった。そして現にその作品においてそれが描き尽されると、そこに新しい問題が次の作品のテーマとして既に内的に熟して期を待っているのである。『虹』という作品の世界が統一を乱した感を与えて終るのも、他面からみれば、この様にロレンスという作家の懐く問題の本質とその追究の仕方から生じた自然な結果だとみる事ができよう。

次の作品、つまり『恋する女たち』に託されたテーマは、一言で言えば、人間の存在の根源である肉体の生命を如何にして維持するか、より具体的に言えば、如何にしてそれを生活の中に日常化し文化の土台に据えるかという事である。無論それは究極の理想であって、ロレンスはそれを可能だとしているわけでもなく、その努力の実相を描いているわけでもない。ジェラルド・クリッチとグドルン・ブラングウィンとの関係は初めから破滅の宿命を与えられているし、ルパート・パーキンとアーシュラ・ブラングウィンとの関係も対照的にあるべき姿の芽生えを暗示しているにとどまっている。だが、ここで人間の肉体的存在が文化や文明の問題として初めて表面化し、ロレンスという作家が、肉体の生命という暗い原始の世界を彷徨しながら、ようやくその糸をたどって、現代の問題を暗々裡の世界から昇華させて広い視野の中に目前にするに至った事は極めて重要な事と言わねばならないのである。ロレンスが性や肉体の問題が真に人類の遭遇した現代の問題である事を教える意味で極めて本質的な重要性をもった作家である事の一つの姿をここに見て取る事ができるのである。

『虹』におけるアーシュラはアントンの肉体を超えたところに魂の憧憬を馳せて、明確な輪郭を把み得ないその求める世界を虹のイメージの中に託そうとした。その新しい世界は言わば別の次元のものである故に、全く別の作品として生まれ変わる必然性があったのだが、『恋する女たち』に再び登場するアーシュラは『虹』における彼女をその儘移した存在ではなくなっている。

彼女のもつ肉体的生命の水々しい気はその儘受けつがれているが、『虹』において彼女がもっていた、そしてもっていたがためにアントンとの関係を不毛に終らせる一因ともなった、精神的或は観念的憧憬というものを完全に払拭した存在になっているのである。言い換えれば、アントンとの接触の後に魂の憧憬が満たされぬ儘うつろに残されるという、本質から遊離した姿に陥る可能性をもった存在ではなくなり、あくまで実体に密着した慾求に忠実に従う存在となっているのである。それは、観念的な慾求の虚しさを知り尽したというよりは、そうしたものに穢されない無垢な存在にすっかり生まれ変わっているというべきものであろう。

虹のイメージに象徴された彼女の憧憬のもつ観念性を全く別の意味でもたされているのはパーキンである。それは、観念の慾求に彼が身を任せているという意味では必ずしもなく、あるべき両性関係の姿に対する明晰な認識を彼がもっているという事である。彼の求める理想は、精神や魂の憧憬ないしは陶醉という渾沌とした中に自己を放棄する事ではなく、つまり両性が渾然一体となって一種の夢幻の状態を生み出す事ではなく、両性がそれぞれ男女の特質を深め対極に孤立して向き合う事によって天体における星の如く透明な力学的関係を維持する事にある。そうした関係に働く力学的な力は観念的なものではなく、太古から流れる両性の赤裸々な生命の対峙する力に他ならない。宇宙の生命はそうした自我の圧迫を捨て去った両性の孤立分離した均衡の中に維持され、個々の人間のもつ時間的空間的に自己に埋没する有限性の克服を可能ならしめるのである。

パーキンの観念性とは、両性のあるべき姿に対する明晰な認識という知的な高みに彼が達している事を意味していた。アーシュラは人間の存在を観念的に

みるそうした性向とは既に無縁の女性になっていて、自己の生命の核の盲目の衝動によって動かされる、言わば極めて本質的な存在になっている。パーキン は彼女のそうした純粋な姿に惹かれるのだが、同じ特質を彼ももっており、従って同時にアーシュラも彼に惹かれる。ここで二つの問題がその間に生じる。一つは認識の差による二人の疎隔であり、一つはパーキンの中に巣喰っている一種のペシミスティックな精神の臭みである。

パーキンは激情の愛が究極のものでない事を知っている。もし愛というものがあれば、それは眠りの如き静けさに人を導くものでなければならぬと考えている。であるから彼は自己の認識に従ってアーシュラとの激情による接触を避けようとする。彼女の中に無垢な生命の発露を見た彼は、そこに驚きと喜びを感じると同時に、既に自分が獲得している宇宙の生命に対する明晰な認識の高みに彼女を巻き込もうとするのである。一方彼の如き認識の働きに無縁の彼女はあくまで個体としての生命の堅固な歩みを固持して、彼の観念の稀薄な雄飛を無視するのである。彼の認識が正しいものであるかどうかはこの際問題にされていない。その認識の中に彼自身やアーシュラの無垢の生命のもつ本質が正しく把握されているとしても、認識それ自体が生命の核を蠢動させると考えるのは観念の錯覚であり、生命はそれ自身の次元の衝動によってのみ動くのである。勿論パーキンとアーシュラは現実に生命の次元で交流し合っているのだが、彼の認識の観念的傾向が彼女の実体その儘の余りに純粋な生命との間に一種の否定し難い虚ろな空間を生ぜしめているのだと言えよう。

愛は究極的なものでなく、愛や個人を超えた何かが存在するのだという考えはロレンスの世界の根柢であり、パーキンの認識もそれに倣ったものである事は言を俟たない。彼の問題の一つは、自分が理想として認識している宇宙の生命の姿と現実の人間の姿との懸隔の大きさである。人間の生命の在るべき場所に関して明晰な認識をもつが故に、現実にある姿への怒りや失望も大きくなる。だが、彼は現実の姿への絶望に埋没する人間ではない。ジェラルドとの会話の中で、結婚に唯一の希望を抱く、と彼は言い、ジェラルドとも理想の関係を求めようと意識している。又彼は、認識のもたらず孤高の座にじっと坐している

人間でもない。彼は如才なく人々と接し、ポヘミアン達の中でも重要な存在になつてみせたりできる人間である。そして、こうした彼の特性からもう一つの更に大きな彼の問題が生じて来るのである。

それはハーマイオニ・ロディスとの関係に表わされる、観念や言葉で物事を鋭く断ち切り、認識の上ではすべてを見透してしながら自ら生命の行動に無心に参加する事ができないという根深い習性である。それは、観念の世界とは全く無縁なアーシュラに観念の認識の力をその儘押しつけようとする彼の説教癖に最もよく出ている。馬を力で自分の意志に従わせようとしたジェラルドに憤るアーシュラに対して、パーキンは女も馬と同じくより高いものの意志に従おうとする本能があるのだと説く。妹のグドルンは、そのパーキンの説教をジェラルドに惹かれている自分を正当化するのに利用する知力を働かせるのだが、アーシュラにはそうした習性は全くない。肉体の自我の力で激しくパーキンに近づこうとする彼女を、彼は観念の力で彼を吸収しようとするハーマイオニと同列において、孤立して存在し得ない肉体的自我の強い女と見做すのである。そこには、言わば盲目の衝動に動かされている彼女の無垢な姿に対する認識の高みからの冷酷な凝視があつて、自ら彼女の次元に降つてその生命を慈しむ優しさが欠けているのだと言わねばならない。観念と肉体と互に異つてはいるが、同じ様に自分を吸収しようとする強い自我の存在としてパーキンはアーシュラをハーマイオニと同列においてみたが、同時にそれはハーマイオニと同次元に立つてアーシュラを見ている事にもなるのである。ハーマイオニにとってアーシュラは自分に欠けている肉体の力をもっているが故に敵であり嫉妬の対象である。無論パーキンのアーシュラに対する感情にはそうしたものはない。だがこの時彼は、無意識のうちに住み馴れたハーマイオニの世界に身を隠して、アーシュラという言葉ば裸の儘陽光に晒されている新鮮な生命の力を隠微に玩んでいるのである。

勿論パーキンは作品の世界の主調からみて、その口から出る言葉に誤りがあるわけではない。彼の深い病根は、観念というものはたとえ正しい認識から生まれたものでも、すべてのものを完成された自己の視点から観察する冷酷さを

持ち得るものであり、更にそこにハーマイオニという馴れ親んだ分身がいる事、および、高い認識によって強く弾劾する現実の世界に自ら身を没入してその毒を身につけ、それを生活の術として体得するという不純に墮する可能性を含んだ精神の強さ、巾の広さを彼が持っている事、の二つに集約される。彼はしばしば、精神の正しさに自足するハーマイオニを批判しながら、実はアーシュラに対してはそれと本質的に同じ態度を自らとっている事になる。言わば観念のメカニズムの危険性に身を半分浸しているのであって、あくまで純粹で自己の実体に密着しているアーシュラにはバーキンのそうした観念性の穢れが厭わしいのである。彼は彼女のもつ生命の実体そのものに近づくのではなく、女との接触よりもそれを手段として観念の慾求を満たそうとしているのだと言わざるを得ない。後になって彼がハーマイオニと別れようとするのはそうした自己の中にある危険な可能性を捨て去るためなのである。

バーキンとアーシュラは本質的には互に同様の無垢な生命で惹き合っているのだが、彼には身にしみついた観念の不純性があり、彼女には観念の未熟さから来る盲目性がある。そこに二人の間の魅惑と敵意があり、それは性の激情への嫌悪と観念の冷たさへの嫌悪となって平安な結びつきを害ねてしまう。観念の不純性と激情の盲目性を互に認識し合って近づく事行が二人の課題となるのである。

バーキンは激情に身を任せてアーシュラと接触した後、きっと自分の求める静かな眠りの様な愛情や優しさが遠くに押しのけられるのを感じる。そして既に忘れていた筈の古い慾情を呼び起こされて、アーシュラと自分との落差を覚えるのである。彼の求める関係は一定の空間において静寂と孤立の中に互の均衡を保つ事である。濃密な肌の接触の熱情を求めるアーシュラには彼の慾求のもつ冷たい脆弱な空間の緊張感が恐ろしいのである。各々の中の同じ本質に惹かれながらも、接触した後こうした対立した感慨に誘われる事の中に、それぞれの観念或は肉体の自我の慾求やその強さが現れていると言えよう。

この二人の男女が自己のおかれた状況を脱出する契機がそれぞれに起る。アーシュラにとってそれは池で二人の人間が溺死した事件であった。その時バー

キンは、死ぬ事自体は大した重要な事ではない、死は現代の腐敗した生の終焉と新しい生の胎動を生むかも知れないのだ、という意味の事を言う。その時のアーシュラにとってそれは説教であり、彼女は耳を傾けながらも身を退けて自己の自我の本質を守ろうとする。だがこの出来事は、彼女に死というものと及びその奥にあるものを自己の生命の有り方を動かすべきものとして考えさせる重要な契機となるのである。

アーシュラは自分が一つの成熟の域に達している事に気づき始める。それは熟した果実が木から落ちる様にそれまでの自分の生の有り方の終りを意味していた。死というのはその先にある世界に入る事に他ならない。人間は当然死というものを経験せねばならず、死の世界が何であるかは分からなくともその世界が確かにあってそこで新たに無垢な生が始まる、それは死によって人間が人間を超えた、或は人間だけのものではない世界に入って行く事、言い換えればアーシュラは、死に遭遇する事によって、死によってこそ、人間は人間を超えた人間に非ざる宇宙の生命へのつながりを認識し得るのだと考え始めるのである。この時彼女は正しい意味で確かにパーキンの認識の高さに近づいたのだと言えよう。それは心に或る平安を与える認識だったのである。だがこのすぐ後ロレンスは、彼女の彼に対する嫌悪を憎悪にまで高める様にしむけている。それは、肉体の病を軽視した彼の生き方と、娘を溺死させたクリッチ家の人々に対して彼がみせた破壊的な分析癖に対するものである。そして又パーキンの方はアーシュラの我慾の吸収力の強さと性の激情の閉鎖的な狭さに対する嫌悪をつのらせて、むしろジェラルドとの同性愛的な結びつきを慾したりするのだが、こうした事は彼の方からも彼女に近づいてゆくためのクッションの様な意味を持っていると言えよう。

死に関する考察によってアーシュラは現在の自分の存在を乗り越える契機を把んだ。パーキンはこれまで否定せんとして意識的に遠ざけてきた生命の激情の存在を再認識する事によってアーシュラに近づく拠り所とするのである。その契機となるのが水面に映った月の姿を消滅させようと試みて月の存在の強さに屈服する場面である。輝く月の影はアーシュラのもつ女の性の激情を表わし

ているとみる事ができる。パーキンはそのものから離れた世界に孤立を保った儘アーシュラとの関係を維持しようとしてきた。だが彼は、そうした考え方が彼女に対する態度として間違っているかも知れない事を暗に感じるのである。月の影は投石で幾度か破壊されても必ず元の姿と輝きを取り戻す。夜の明晰な静けさと冷たさの中に月の影は厳然として自己の存在を維持し、むしろそれによってこそ夜の完全さも保たれるのである。この時パーキンは女の性の激情の否定し難い深い存在を暗々裡に受け容れざるを得なかったに違いない。

そうした彼の一部始終をひそかに凝視していたアーシュラにとっては、冷たい月光の醸し出す夜の明晰さはむしろ厭わしいものであった。彼女は完全な暗闇の中の濃密な暖かさを慾するのである。だが、彼が追い払おうとしていた月の光とは他ならぬ彼女自身の激情でもある。彼女は自分の身が投げ出されるのを感じて意識を失いそうになる。だが同時に彼女は、投石によって破壊された月光の断片がやがて元の完結した力強い中心を回復してゆくのを意識している。その姿こそむしろC・クラークの言う如く⁽¹⁾、パーキンの求める生命の孤立した姿を示していると言って良いであろう。彼が言わば身を引いて冷静にこの出来事の意味を吸収するのに対し、アーシュラは盲目の内的生命に押されて自己の力のより豊かな充実を感じ、男に対する足場を一層堅固にするのである。ここでパーキンとアーシュラの激情と静寂、愛と個との相克が新たな局面に入ったとみるべきなのであろう。少なくともパーキンは、観念や言葉でアーシュラを自分の世界に引き込む事の不可能を知った筈なのである。

だが、ここで二人が完全に近寄るわけでは決してなく、女の慾望が強く密着して激情を迫ってくると、男は頑強に自己の観念と意志を固持して静寂な孤立した幸福感を保とうとする。パーキンの頭の中では、この世界に存在するもの、既に存在したもの、の占める位置とその意味が明晰に類型化されている。彼はアーシュラと自分との関係をそうした世界観や現実に対する批判を含んだ上で決定しようとする潜在的な意識がある。彼は又、自分が慾しているのは日常生活を超えた官能の世界ではないのだと考えている。官能の極限には人間の魂や精神の関知し得ない隠微な世界があって、そこでは人間の創造的な活動への慾求

が姿を消し、腐敗と崩壊の甲蟲の如き存在があるだけだと言う。それは西アフリカ産の木彫の女像からの連想なのだが、白色人種の自分達も形こそ違え、同じ崩壊の過程にあるのだと考える。言わば、現代の機械文明のメカニズムと精神のシニシズムの冷酷な破壊力の中に魂や精神の関知し得ない官能や感覚の世界の原理があるのだと言えよう。そこでパーキンは、人間の意識的な知的操作なしに現在の状況から脱却する方法はあり得ないと考え、感覚や官能の世界に淫する危険性を極端に恐れて、個々の人間の魂や精神の明晰な輪郭を保とうとするのである。アーシュラと自分の関係もそうした認識の世界の一環として眼に映らざるを得ない。極めて素朴な形で存在する事しか知らない彼女の生命を彼は自己の観念の高みに引き上げてその中でそのあるべき、と彼の考える、位置に、つまり彼との間に一定の空間を保った位置に据えようとしていたのである。

ところで、そうしたパーキンの観念の働きに関係なく、彼とアーシュラとの間には無垢な生命の暗黙の結びつきが既に厳存している。彼は彼女と同じ素朴な次元での存在を含んだ人間であり、そうした本質的な存在の力をもっている事と人類一般のおかれた状況に対する認識の高さととの大きな落差が彼をして、ペシミスティックな精神の臭みと世俗的な如才のなさとを同時に含んだ人間にしているのだと言えよう。だが、一人の女との究極的な結婚が自分にとっての救済である事を確信している彼は、自分が造りあげた認識の世界に観念的に固執しすぎている自分に気づき、アーシュラの盲目の激情を自分が高い所から一方的に拒絶していた事を知るのである。現代の人間の現実の姿を観察し尽してゆけば、たどりつく所は一種の空しい恐怖に他ならない。しかし、彼のそうした恐怖感又は危機感とは常に細い綱の上で平均を保とうとする鋭さがあると同時に、日常生活の如才なさを生む厚い表皮に被われた観念の強さをも持っている。そこから、自分が在るべき姿にない事、在るべき場所にいない事に鋭く反撥しながら、自分の周囲の世界に否定的に喰い込んでゆく闊達さともいうべき精神が生まれてくるのである。パーキンの得ている認識や理想の内容は恐らく彼にとって全く正しいものであろう。人類が唾棄すべき姿を呈している事を認

識していながらその中に生きている彼にとって、観念の強さと現実の奥深さとの間に鋭い対立と隠微な馴染みが同時に存在し得る状況が出来上ってしまっているのである。人類が死という崩壊への道を歩んでいるという厳然たる事實は、彼にその中で生きる習性と本能を与えてしまった感がある。K・サガーは、バーキンはそうした死への道程に屈しようという意図を持っているのだ、⁽²⁾ と言、G・H・フォードは、バーキンは自分が遁れようとしている死と馴れ合った世界に深く、殆んど宿命的に魅入られているのだ、⁽³⁾ と言う。彼は自分が陥ったそうした状況の中で、内奥にひそむ無垢の生命の力を生活の表面から意識的に捨て去る事によって周囲との間に鈍痛をひそめた狎れを作りあげていたのである。彼がアーシュラの激情を拒絶して自分の魂や精神の慾求を前面に押し出そうとするのも、たとえその事自体は本質的な正しさをもったものであるにもせよ、以上に述べた馴染みや狎れの夾雑物を重く引き摺っている事の証しなのである。バーキんに未来への道を残すのは彼の耐えて待つ力なのだ、とM・フリーマンは言っているが、彼の問題は、夾雑物を払拭して、アーシュラの無垢な生命の美しさと脆弱さにそれ自体の次元で接触し、合わせて自己の中にあるそれと同質のものを純粋な姿に抽出する事なのであった。彼をそうした方向に動き出させるところにアーシュラとの出会いの意味があったのである。

アーシュラは死の意味を考察する事によって認識の世界に足を一步踏み入れた事になる。それは個人の愛を超えたものを認識する事への出発点なのだが、バーキンの魂の慾求にその儘応ずる事では決してない。彼の求婚にその場で応じないのはその観念の不純な夾雑物を完全に払拭する事を要求するからである。求婚時のバーキンは魂の自我の孤立を守る観念性が表面に出ていて、アーシュラの繊細な生命を不安におびえさせる冷たさをもっていた。それは例えば、彼女から即答を得られなかった彼がその儘ジェラルドの所に行き、自分の中にある別の世界に没入しようと試みるところに見て取る事ができる。ジェラルドとも本質的な関係を造りあげようというのが、彼の魂の自我の慾求の一面であると言ってよい。そうした二重の慾求を持つ事の是非は別として、その自我の有様の正当化と表出の仕方に観念の世界に住み馴れた人間の傲慢さと不

純性がひそんでいるのである。アーシュラという生命の実体に密着して生きて
いる女性にとって、その内容の是非はともかく、彼の観念にまつわりついてい
る半ば無意識の鉄面皮な自負が厭わしいのである。

だがこの時既にアーシュラは死を超えた生命に思いを至しているし、パーキ
ンはジェラルドと組み打ちを終えた後にもアーシュラの存在がより本質的なも
のとして意識に浮ぶようになっている。彼は間もなく、人類への危機感を掌中
にして観念の刺激を求める破壊的な存在から抜け出ようとするであろうし、彼
女は間もなく、激情を強制する盲目的な存在から抜け出ようとするであろう。
そうする事によって彼女は新しい世界を獲得し、彼は古い世界を捨て去る事に
なるのである。

パーキンがアーシュラに宝石の贈り物をする時のいきさつで二人は完全に生
命の無垢な美しさと静けさを共有する様になる。勿論、彼女の激情への憧憬や
彼の観念の習癖は尾を引いて残るであろうし、新鮮に輝く素朴な女と経験の暗
い重みを持つ男との間には互に関与出来ない世界が残る事になるであろう。だ
が少なくとも二人は定かならぬながら全き関係への途上に立つ事は出来たので
ある。アーシュラはパーキンの肉体の中に激情を超えた生命の強さがあり、自
分の中にも自己を超えて静かに孤立している生命があって、激情を抑えた彼と
の静寂な関係の脆弱な緊張にじっと耐えるべき事を知ったのである。パーキン
は観念の重圧を避けてアーシュラの生命と同じ次元に自己の生命をおき、彼女
の我儘な慾求に静かに応えじっと堪える純粋な心を蘇らせたのである。その二
人の共通の世界では、肉体や魂の自我の慾求を強制する事なく、孤立と静寂の
対極関係を維持する隠れた努力が始まらねばならないのであろう。

大陸に向う船中の暗闇の中で、パーキンは二人の生命の均衡の中に或る魂の
平安を感じとり、アーシュラはその静寂の中にも情熱の焰のかすかなゆらぎを
予感している。そこには両極に対峙して均衡を保っていながらそれぞれの自我
の慾求の深さに究極的に動かされている二つの異質の存在を見る事ができる。
パーキンはともすれば情熱の焰にゆらぎそうになるアーシュラを深い慈しみの
心で支え、アーシュラはパーキンとの静寂な結びつきの中に自己を超えた生命

の存在を信じるに至る、そうしたところで、二人の間に関するロレンスの筆は本質的には既に擱かれてしまっているのである。

パーキンとアーシュラとは反対にもう一組の男女、ジュラルドとグドルンは大陸に来てその破綻を暴露する事になる。大陸とは雪と氷に包まれた酷寒の山である。パーキンとアーシュラはその非人間的な冷たさに耐えかねてその場を去るのだが、ジュラルドとグドルンはその中に包まれてこそそれぞれの本質の行きつくところに到達するのである。

ジュラルドの存在はグドルンによってしばしばいくつかの金属の輝きや響きに喩へられている。その冷たい流動感に彼女は惹かれるのだが、そこには彼女の精神の本質的な慾求に触れる何かが存在するからであり、それを作者ロレンスは、「北方的美へのノスタルジー」という言葉で表わしている。ジュラルドの周囲には冷たい孤立感といったものが終始つきまとい、それは暖い連帯感に高まる可能性を持ったものでは決してなく、冷たさと孤立の厳しさを一途に深めるだけの直線的な本質を持ったものなのである。

そうした彼の肉体の冷たい強さを持った存在に呼応するのはグドルンの鋭い冷笑的な感覚である。その感覚は深い内発的な主観として彼女の存在の中に定着するものではなく、対象との接触の連続した緊張感への刹那的な陶醉を求める眼醒めた冷たさをもったものである。この場合対象とは生命の様に内に蠢めく母体をもった温いものではなく、純粋に物質的な或は物理的な存在を意味する。ジュラルドは世界をメカニクな存在として捉え、彼自身もメカニクな存在と化している人間で、グドルンにとってはしかも、彼がメカニズムの組織の頂点にいる事が魅力の因なのである。例えば、妹を深して水中からボートにあがった彼の姿にグドルンは惹きつけられるが、それは濡れた衣類の密着した彼の体が金属に類した物質のもつ「形体の純粋な美」への陶醉に誘うからに他ならない。非人間的な水の冷たさの中で特にジュラルドの肉体は金属物の蠱惑的な輝きを放つのである。グドルンは又、そうした純粋に物質的な冷たい美をもつ肉体を統率する彼の意志力の大きさに惹かれてもいる。そこには暖い血

の流れや柔らかな肌の醸し出すこまやかさや優しさは見られない。F・R・リーヴィスの評によれば、ジェラルドは他を圧する行為の中に意味と目的を見出して内的欠落感を忘れようとする人間である⁽⁵⁾。物質のメカニクな力、それを自ら支配せんとする意志、ジェラルドのこの二つの面にグドルンの感覚は非人間的な冷たさという共通の場で強引に魅せられてしまうのである。彼女にとっては魂や精神に関する問題は本質的なものではない。ある雑談の最中に、人類の未来に関するパーキンの予言を求めようとしながら、ふとジェラルドの金属的な存在の与える感覚の世界に引き込まれてしまうのはその現れの一つである。

純粋に感覚的な世界とは外的依存の世界であり、「オペラ・グラスを逆に覗くように」自他の間に冷たい空間を保った世界であって、それを超えて自己を揚棄した世界へ道を開く事はない。アーシュラが言わば無意識のうちに内的生命の一種の目的志向性をもっているのに対して、グドルンは常にそうした眼醒めた自意識の無目的の冷たさを捨てない女なのである。一方ジェラルドは彼女の様な他者に対する強い自意識は持っていない。彼の自意識は自己のおかれた状態に対して反応するだけの閉ざされたものにすぎない。彼は他者との関係の中に平安な均衡を見出す事はなく、他者を自己の内に力で吸収する事によって存在の不安を解消しようとする、従って、自分の慾求や不満に鋭敏に反応する事は出来ても、自己を客観視して批判の眼を向ける事は出来ず、外部に対しては全く盲目の自意識に翻弄される他はないのである。だが、そうした二人の男女の全く異質の自意識を互に呼応せしめたのが冷たい死の世界だったのである。その意味で湖の冷たく深い死の世界でジェラルドが妹の生のために空しくその力を浪費する宿命的な悲劇性にグドルンが動かされるのは極めて象徴的と言わねばならない。

二人に共通する点の一つに生命の原形質的なものに対する嫌悪感がある。ジェラルドにとってそれはメカニズムの世界を超えたものだからであり、グドルンにとってそれは感覚の世界を超えるものであるからに他ならない。こうした二人の特質は、他者の生命に対する彼の嗜虐的な冷酷さと、自己の生命が抑圧された狂熱から解放される事への彼女の恐怖感となって現われている。ジェラ

ルドが手にした兎を力で捻じ伏せるところがある。兎から受けた傷の血によって二人の間に一種の同盟が成立つのだが、それは兎によって認識させられた生命の原形質的なものに対する恐怖と嘲笑の上に立つものなのである。二人は自己の生命の根源の真相を知る事を恐れて、それをメカニックな意志の力で押し潰そうとする。ジェラルドの心を苛立たせたのは兎の生命の生暖かいつかみどころの無さである。それは生命の原形質ともいうべきものの痙攣によって彼の肉体に伝わって走る否定し難い原始の力である。彼の怒りは自己のメカニズムの世界を根柢から揺り動かそうとするその流動体の力強さに対する反撥に他ならない。彼の本性は怒りにとどまってはならず、意志に支えられた力でそれを征服させてしまわずにはおかない。自然の中にある原始的な生命の蠢動をメカニズムの物理的力によって制圧しようとするのである。そこにはトロッコにおびえる馬に対してみせた彼の意志的権力慾につながるものがあるのだが、兎の生命はより小さく、又それ故にそれだけ生暖い生命の痙攣的な蠢動の隠微な強さをより直接に感じさせる。だがジェラルドの残酷さの中には、原始的な生命に対する恐怖感や権力慾があるだけでなく、その生命の核を露出させて痙攣的な蠢動を呼び醒しておいてその執拗な力を意志力で制圧しようという深い敵愾心が見られる。彼の生命はバーキンのその如く個的な強さをもって孤立しているのではなく、メカニックな支配力による他者への優越感の働きの中に存在していると思われるのである。グドルンは、彼の存在を深いところでおさえ人間性を離れた明晰な輪郭と動きをもつそうした力に強い興奮を覚えるわけである。彼の意志的な機械力の前に兎の生命の矮小さとみじめさが歴然としている事が彼女の感覚にひそかな快感を与える。そこには非人間的な金属の醸し出す魔力があって、自らその世界に参与し没入する事なく、感覚への鋭い刺激を吸収させてくれるからに他ならない。

周囲に対しては本質的に盲目のジェラルドが自ら現実に身を入れるのに対し、自他の意識に抛るグドルンはあくまで退いて感覚の世界の純粹さを守ろうとする。従って、ジェラルドが時には自己の生命の露出に陶醉する事があるのに対し、グドルンが本質においてそれに恐怖感を抱くのは、感覚の主体として

の自己を放棄する事を恐れるからに他ならない。この点に関して二人の間に対立が生じるのは、ジェラルドの傾向が昂じて、グドルンに対して「蓄を押しあける様な生命の露出への残酷な歓び」を感じ始める時であり、その時彼女の恐怖感 は彼への憎悪に高まるのである。

ジェラルドとグドルンの関係は具体的には、父親を失ってメカニズムの真っ只中にある自分の存在の基盤が大きく揺らぐのを感じた彼が夜ひそかに彼女の部屋を訪れて慰安を求め、彼女がそれに応ずるところから始まるというよい。彼は言わば生命を露出させてすべてを彼女に委ね、彼女はおびえる生命を彼の力に任せながら自意識の牙えを見せていたのだが、そこには二人の関係の本質を形造るものがあると考えられる。メカニズムの世界に馴らされてきたジェラルドの生命は一挙にその悶えを解放しようとし、彼のメカニックな存在の高さに魅惑されているグドルンはそうした彼のさし迫った慾求に応じる事によって彼及び彼が与える感覚的魅力を掌中に収めようとする。言わばそれは、彼が彼女に役割を要求し、彼女がそれに応ずる事によって互の関係のバランスを保つ事なのである。二人はそれぞれの本質に従って活力の蘇生と感覚の歓びを得る。そこには完全な依頼心と完全なナルシズムがあるだけで、二人が共通に存在し対等たり得る場がない事に留意せねばならない。グドルンは自己の生命の露出を恐れているし、ジェラルドは他者の存在の本質を理解する力に欠けている。それぞれ自己だけの世界に閉塞或は自足していて、現実の肉体的な肌の触れ合いをもっていないながら、実際にはそれと遊離したところに生きている事しかできない、或は自ら生きていようとする、それがこの二人の本質であり、その破綻は当然ここから生じて来るのである。

ジェラルドの慾求の宿命的な強さはグドルンの心に母性的本能を意識させたという事ができよう。それは優しい愛というよりむしろ一種の優越意識或は支配本能ともいうべきもので、彼のメカニックな存在の力の強さに精気を与えると同時にその冷たい美しさを掌中に収めておくものであった。だが、パーキンの生命がアーシュラとの接触によって有機的にその表現を変転させてゆくのに対し、メカニズムに馴らされたジェラルドの機械的な生命には新しい次元への

進展・変容というものがない。彼は自己の閉ざされた自意識の世界を突き破る事ができない。自分が行き詰った状態にある事は痛感できても、彼の精神は単なるメカニクな繰り返しを続ける以外に働く力を有していないのである。グドルンに対する彼の慾求の宿命的な不可避性や彼女の感覚に与える彼の肉体の刺激が如何に強かろうとも、彼は時間を経てそれらを新しい本質や次元へと転化する内的エネルギーを持たず、あくまでメカニズムの同質性の中にとどまっている他はない。一方自己の生命の解放を恐れ感覚の世界を求めるグドルンは彼の内に喰い入ってその閉塞を解く力は持ち得ないのである。

やがて彼女は彼の繰り返しの生命の行きつくところが虚無である事を知る。感覚への新鮮な刺激が失われてゆくからである。彼の彼女に対する役割の慾求が強まるにつれて、その実質は固定化し強圧的になる。それは彼女の最も嫌うところである。ロレンスは、自分は人生の漂泊者なのだ、と彼女に言わせ、彼女には決定的な生の欠如があったのだ、と書いているが、そこにジェラルドの生命に触れてメカニズムの呪縛を解いてやる女としての性の力を欠き、逆に感覚の世界に鋭さと純粋さが失われるのを恐れて彼を捨て去る冷酷さがあるのだと言えよう。

こうした二人の特質はボヘミアン達の中での彼等の姿にも見る事ができる。ジェラルドのミネットに対する関係は形こそ違え彼の本質である繰り返しの生命の一つの現われにすぎない。最後にグドルンが彼を幾人もの女と関係をもつ男だと言って敵愾心を強めるところがあるが、生命の変容をなし得ない彼は一人の女との関係を質的に深め究める力に欠けており、逆に同じ次元での関係がいくつか併存し得る事になる。グドルンに対する彼の関係にも必ずしも深い根があるとは言えない。D・キャヴィッチは、彼がグドルンに惹かれるのは彼女そのものに直接呼応しているからではなく、他の様々な状況によって彼の中に生じた感情を転移しているにすぎないのだ、⁽⁶⁾と言っている。そうした感情の転移の場所としてはグドルンは決して適切ではないのである。一方彼女の特質は、パーキンの手紙を玩んで笑い興じているボヘミアンに対する彼女の憤った反応の中に最もよく現われている。彼女の怒りはボヘミアン達の不謹慎な軽薄

さに対するものというより、むしろ自己の現実の墮落と崩壊をバーキンに指摘された事に対するものであると言わねばならない。手紙の強い語調は彼女に「決定的な生の欠如」という忘れようとしている自己の本質を不快にも思い出させたのである。バーキンが姉アーシュラの夫である事はこの場合従である。A・P・ベルトッチの、彼女はバーキンの相手を選ばぬ説教癖に腹を立てるべきなのか、手紙に含まれている自分への不吉な前兆を恐れるべきなのか、判断がつかない位なのだ、⁽⁷⁾という評は勿論後半にポイントをおいて読むべきであろう。グドルンは現実の有りの儘の姿にじっと耐える素質や力の持主ではなく、バーキンの言を借りれば、芸術でも何でも一つの事に深刻に打ち込めない彼女は、言わば現実から視線を反らして微妙な感覚の世界へ受動的に刺激を求めてゆく存在なのである。

バーキンとアーシュラは大陸の酷寒の中で互の結びつきの本質を確かめ合うのだが、ジェラルドとグドルンはその亀裂を決定的なものにする。大気の峻厳な冷たさの中に聳え立つ雪山の姿にグドルンは自己の感覚の世界の底知れぬ深さへの陶醉に誘われるのだが、ジェラルドはすべてを凍らせる神秘の世界に自己を揚棄できずに出口のない金属的慾望の煩悶の枠内に取り残されてしまう。彼は彼女の中にある彼の関知し得ない部分によって生じたこの決定的な懸隔をメカニックな意志の力によって征服しようとするのだが、ロエルケによって彼女は、研ぎすまされた感覚の世界の脆弱な頂上をつたって突き進む事の中に自由の歓びと死からの脱却を見出し始めていて、メカニズムの世界は次第に恐怖と憎悪の対象でしかなくなってゆくのである。

ジェラルドがグドルンに与えた歓びの終局は二人で櫓に乗って急斜面を滑降する時の息をのむ力感であった。彼が死を賭して全速力の櫓を操っている間に彼女は彼から受け得る最高の歓びの瞬間を味っていたのである。ここには彼の生命そのものではなく、彼のメカニズムの極致があって、彼は完全にグドルンの道具としての本質に没入し切っており、彼のメカニックな力は完全に彼女の知力に抑えられてその感覚に奉仕する存在になり切っているのである。それは確かにある意味で二人の最も充実した瞬間でありそれぞれの本質に則った

瞬間だったのである。勿論破滅がすぐ一步後ろに来ていた事も確かであった。如何に大きな力を有しようとも、ジェラルドは扱われる機械にすぎなかったものであり、その機械である事を彼はどうしようもなかったのである。機械の力が空を切る事へのジェラルドの不安とその力の本質を知らずながら利用するグドルンのシニシズムに二人の関係は支えられていたのだと言えよう。その間に揺曳しているのは死の影である。

パーキンとアーシュラにおいては死を考える事はそれを受容して人間を超えた生命に近づく契機となるものであった。本質的に新しい次元へ飛躍するという事がないジェラルドとグドルンにおいては死は恐怖と逃避の対象でしかない。彼女は彼のメカニズムの中に死を予感していたと察せられるが、感覚を超えた死の世界に彼女は恐怖を覚え、抑制と逃避の本能を同時に働かせ始めるのである。そこに彼の強い肉体の愛に歓喜しながらもどこか深いところで不信と恐怖の念を禁じ得ない所以があり、彼の本質の究極にあるものを明晰に認識する恐怖は、言い換えれば、自己及び現代をとりまく現実の究極にあるものからの逃避につながってゆく。それが死からの逃避であり、同時にパーキンの手紙に対する彼女の嫌悪感の実体なのである。彼女は老クリッチの死に対する意志的な闘いには感嘆するのだが、死そのものがもたらす世界には思いを至さない。死との闘いに人間の存在の力を見る事はできても、死の意味を直視する事はできないのである。一方ジェラルドはこの作品においてはある意味で死の宿命そのものだと言ってよいので、死を乗り越える事とメカニズムの頂点に立つ意志の力とを混同する事によって彼は死や生命のもつ宇宙的な次元の意味について全く盲目である事を暴露してしまう。死への考察から何も吸収しない点で二人は共通であるが、自他の明晰な認識をもたず、他を力で制圧しようとするジェラルドにとって死とは自分がいなくなる事への恐怖であり、他を対象化し掌握する事によって自己の優位を保とうとするグドルンにとって死とは自己の歪められた生命力を直視させられる恐怖であったわけで、そこに二人のそれぞれの特徴があるのだと言える。だからこそ、彼女を征服しそこねた彼は死へと直進し、彼から身を避け得た彼女は隠微な感覚の世界をまっとうするのである。

ジェラルドとグドルンに関してしばしばロレンスは「宙に浮いた」という形容を使っている。彼の場合には有機的な生命を無機質のメカニズムに置き換えているその錯覚から生じるものであり、彼女の場合には生命を感覚の対象に矮小化する事によるその奥の拡がりからの拒絶によって生じるものだと言う事ができよう。繊細な感覚が金属の感触に飽いた時、金属化された生命は空を切って崩壊し、その間のつながりは冷酷に切断されてしまうのである。

前作『虹』においては現代の背景を充分にとらなかつたために成功しない面があったが、『恋する女たち』では極端に現代の腐敗と崩壊を前面に出したために、結果的には生命の本質の実相よりは時代の病根を弾劾する事になってしまった。パーキンとアーシュラの関係は緒についたところで終っており、その実体は読者には捉え難い。というより実体が姿を現したところで筆が擱かれているわけである。パーキンが観念の曇りを払ってアーシュラと接触するまでの事しかないと言って良いのだが、彼が何故それ程に苦しんだかという事を考えると、そこに宗教的観念と明晰な認識への慾求の二つが浮かび上って来る。

宗教的観念とは肉体という実体を超えた何ものかという事である。勿論、前作における虹のイメージの如き曖昧なものはここにはない。唯曖昧な観念は曖昧に描かれているだけで、虹というイメージでその曖昧さを糊塗する必要がなくなっているのである。パーキンの追求する観念は作品の中では、アーシュラを含めて他のすべての人物の生活を動かすところまで行っておらず、同時に作品の世界を肯定の方に引く力もそこ以外にはない。そこに神を失っているのに宗教的情熱を失うまいとするパーキンの真面目さと滑稽さが、或は悲劇があるのだと言えよう。ヨーロッパの世界が自らを腐敗と崩壊の形容で呼ぶ時、キリスト教の純粋な観念的存在に対する憧憬を失うまいとする性向がその根源で動いている様に思われる。あるが儘の生命をあるが儘に見てあるが儘に受けとる事ができないのは、観念的に絶対的なものを想定して善悪・正邪の決まりをつけずにはいられない性向から来るものと思われる。『虹』において生命の核という尊い実体を把握したロレンスが『恋する女たち』においてこれ程の観念性

を見せたのは意外であるが、ジェラルドとグドルンに対してパーキンに狂言廻しの働きをさせてまで観念を織り込まずにはいられなかったところに、現代の腐敗の深さと作者の宗教的使命感の強さがあつたと見なければならぬのであろう。こう考えれば明晰な認識への欲求もおのずと理解されるのである。この場合、あるが儘の実体の認識だけではなく、観念上の理想を究極においた上でのさまざまなものの相対的な位置関係をも含めて言うのである。

こうみて来ると、『恋する女たち』の中に真理が実体として描かれる事が如何に少ないかに思い当る。しかもロレンスにとって、真理とは人間と人間との関係の上に成り立つものであるから、なお一層択え難くなるのである。パーキンを通してロレンスが饒舌を尽し、シムボリックな描写を積み重ねても、そこから匂って来る真理の香りはアーシュラとパーキンの間においてすら周囲の臭気に消され勝ちなのである。

それはパーキンとアーシュラが社会的な視野の中に置かれていない事と大きなつながりがある。だが、文明や文化の姿を個人としての人間の魂や肉体を通してしかみないロレンスであるから、この二人が職業を捨てて大陸に脱出するのはその存在の社会的意義がなくなる事なのではない。結婚によってすべてから解放されると同時に、全世界を受け入れるのだ、という意味の言葉が二人の間で交わされるが、M・ショーラーの言を借りれば、究極の責任を負う段になって社会から自己を孤立させても、人間関係からは遊離しない事⁽⁸⁾によってパーキンとアーシュラは深い意味での社会的視野を抜け出てはいないので、つまり全世界を受け入れようとしているのである。言い換えれば、そこにパーキンが夾雑物を払拭していった究極の姿があつた事になる。パーキンはジェラルドやグドルンもいる世界を夢見て大陸に渡ったのだが、その二人からも拒絶されて彼とアーシュラは有り得る最小限の真理しか実現し得ない事になって、作品の実体のもつ真理の重みは一層稀薄になるのである。

人類は滅亡への道を行んでいるというパーキンの認識がある。彼のその認識は自分の中にも死をうながす裏面がある事を知っている程深いのである。人間はなくとも神はなし給う、という認識、人類が消滅した後にも野原に兎が遊ん

でいるという空想、こうしたものに魂の平安を感じる裏には強烈な宗教的情熱がやはりひそんでいるのである。そこまで観念の掌握する明晰な世界を拡大せずにはられないロレンスは、現代の腐敗の実相から人類の死滅後の宇宙の姿まですべてを見透す認識を慾し、その総体を宗教的観念の憧憬に照らして統一するという途方もない精神の貪慾さをもっていたわけである。だが、そうしたロレンスが『恋する女たち』という時代の病根の恐怖の根源を暴露した作品の中で、パーキンとアーシュラの間に辛うじてではあったにせよ、明るい生の萌芽を見せてくれた事は、彼の歴大な視量の中に繰り込まれたものの中で、彼の精神や魂の骨格をなす本質は何であるかを教えている筈なのである。

注

- (1) Clarke, Colin, 'Living Disintegration,' from *The Rainbow and The Women in Love; a selection of critical essays*, edited by Clarke, Colin, Macmillan, Bristol, 1969, p. 224.
- (2) Sagar, Keith, *The Art of D. H. Lawrence*, Cambridge University Press, 1966, p. 91.
- (3) Ford, George H., 'Women in Love: the Degeneration of Western Man,' from *The Rainbow and The Women in Love; a selection of critical essays*, p. 185.
- (4) Freeman, Mary, *D. H. Lawrence: a basic study of his ideas*, Grosset's Universal Library, New York, 1955, p. 67.
- (5) Leavis, F. R., *D. H. Lawrence: Novelist*, Penguin Books, 1964, p. 171.
- (6) Cavitch, David, *D. H. Lawrence & The New World*, Oxford University Press, New York, 1969, p. 68.
- (7) Bertocci, Angelo P., 'Symbolism in "Women in Love,"' from *D. H. Lawrence: Miscellany*, ed., by Moore, Harry T., Southern Illinois University Press, 1959, p. 84.
- (8) Schorer, Mark, "'Women in Love" and Death,' from *D. H. Lawrence: a collection of critical essays*, ed., by Spilka, Mark, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, 1963, p. 53.